



「ジオパーク秩父」の活動と博物館の役割

本 間 岳 史

■はじめに

昨年9月に秩父地域が日本ジオパークに認定されてから、丸一年が経過しました。この間、秩父まるごとジオパーク推進協議会では、秩父ならではの取り組みである「一味違った札所めぐり」や「ジオ端会議」など、様々な活動を行ってきました。また、この2月には、日本ジオパークネットワークの第1回全国研修会の会場を引き受け、日本全国のジオパーク関係者の交流と秩父のアピールに一役買うことができました。

そこで、協議会の一員として博物館がこの間に取り組んできたことを振り返り、「ジオパーク秩父」における博物館の役割を考えるとともに、今後世界ジオパークをめざす秩父地域の課題についても考えてみたいと思います。

■認定後の博物館の取り組み

博物館では、ジオパークのエッセンスを紹介する展示具（ボードと展示ケース）と展示パネルを作り、7～8月に、山里自然館、三峰ビジターセンター、おがの化石館、西武秩父駅仲見世通りの4か所で臨時出前展示を行いました。蝶番で4枚を連結するボードは、設置場所に合せて平面、屏風、四角柱などに変形できるので好評です。11月には浦和パルコへの貸し出し依頼もきています。秩父地域外では、この1～2月に、写真パネル「秩父の地質名所50選」を、さきたま史跡の博物館や県庁渡り廊下で展示し、8～9月には長瀬げんきプラザへ貸し出しました。

これらの出前展示を行う一方、博物館では、積極的に研修会や講演会の講師を引き受け、ジオパークの意義や全国の動向、秩父の見どころや取り組みなどについて、周知・宣伝を図ってきました。たとえば、小学4～6年生を対象としたこども大学ちちぶで「秩父まるごとジオパーク—君も私もジオ博士—」（昨年12月）、自然の博物館友の会総会で「ジオパーク秩父—そのみどころと課題—」（4月）、秩父ジオパーク認定記念講座「遙かなる地底の旅」で「地層変転から見た秩父」（7月）を講演しました。また、大学での講義（昨年10月）や第四紀学会でのポスター発表（8月）で秩父の

見どころや活動を紹介したり、博物館のニュースレター「澁」（昨年10月）、地学団体研究会のニュースレター「そくほう」（昨年12月）、雑誌「天然ガス」（7月）、友の会会報（9月）、雑誌「地理」（9月）などへ「ジオパーク秩父」の紹介記事を投稿し、学生・研究者・自然観察愛好者などへの普及につとめました（私個人への依頼分も含む）。さらに、協議会主催バスツアーでガイドを担当したり（昨年11月、2月）、協議会の総会・運営委員会などで提言を行ってきました。博物館主催の観察会では、秩父ジオサイト探訪として、「和銅黒谷」（5月）、「長瀬岩畳と秩父赤壁」（11月）、「長瀬虎岩と鳩糞石」（来年2月）を実施もしくは予定しています。

博物館のリフレッシュオープンにあわせた企画展「ちょっとら よってがっせージオパーク秩父へのいざない—」（会期：10月6日～1月14日）では、大地（地形・地質）に直接興味のない来館者にも、動・植物や歴史・文化などを切り口に秩父の大地のストーリーにふれていただけるよう、ジオ・エコ・ヒトの連鎖の視点から掘り下げた新展示を展開します。

■「ジオパーク秩父」の課題

ここ数年間、秩父での取り組みに加わり、また先進地の活動を見聞するなかで、秩父地域の課題が浮き彫りになってきました。安定的・持続的な運営を行い世界ジオパークをめざすには、多くの課題がありそうですが、私なりに緊要と思われる点を以下に記します。これらの課題の多くに、博物館の支援・協力が求められるでしょう。

- ◆ジオサイトの整理とガイドブック等の刊行 ◆日本における秩父の意義（ストーリー）の深化と世界における秩父の意義（同前）の構築 ◆ジオガイド育成システムの実現（検定、ガイドの有料化、質の高いガイド、継続性など） ◆全国的会議・研修会等への参加 ◆解説看板の多言語化（日・英・中・韓など） ◆事務局体制の強化と運営費の確保（国際会議等でプレゼンができる通訳や専門家の雇用など） ◆協議会員の役割分担の明確化 ◆「ジオパーク秩父」グッズ等の開発・販売 ◆マスコットキャラクターの設定など

（ほんま たけし・専門員兼学芸員）